

オーロラ観測研究

「南極観測隊に興味はある？」オーロラの研究を始めて2年目に、指導教官から観測隊の募集の話聞いた。そのころの私は、オーロラ観測衛星のデータ解析を行っており、観測経験もなく、南極は遠い存在だった。一方で、幼いころから憧れていたオーロラにもかかわらず、実際にこの目でオーロラを見ることもなく研究を進めることに、違和感を覚えていた時期でもあった。この状況を打破したい、そんな思いで参加したアラスカの

凛としていきる

# 理系女性の挑戦



## 玉手箱を開けるように解析

オーロラ国際会議で、運よく、生き物のようにこのうち回るオーロラを目にすることができた。こんなオーロラをもっとたくさん見たい！これがきっかけとなり、南極観測隊に応募した。観測経験のない不安よりも、新しい

世界に踏み入る期待の方が大きかった。そして、無事に南極行きが決定した。

昭和基地での仕事は、これまで数年―数十年にわたって行われてきた長期観測を継続することだった。観測項目はオーロラだけでなく、オーロラの発生にかかわる地磁気や電離層の擾乱なども含めると20種類近くあった。これらの観測データを、良質な状態で欠

測なく取り続けることに徹底した。うれしいことに、私の担当した1年間が過去数年の中で最も観測時間が長く、解析に役立ったと話してくれた研究者もいた。

一方で、これらの観測の合間に、私の研究テーマであるオーロラ高速撮像にも挑戦していた。データを取得し解析してみると、水のように流れる様子や蛇のように波打っている様子が出ていて、大

興奮したのを覚えている。試験的な観測を何度も行い、帰国後は、オーロラを検知して動く自動観測システムへと改良し、アラスカで観測を行った。データには、これまで報告されていなかったような複雑で高速なオーロラの姿が写っており、玉手箱を開けるように解析を行う毎日である。

昭和基地での越冬生活はたったの30人。助け合いなしでは成り立たない小さな村で、未熟で悔しい思いをしたことも多々あった。こんな私に、これまで体験したことのないたくさんさんのチャンスを与え、サポートしてくれた仲間と、遠く日本から助言をくださった方々に感謝している。まだまだ挑戦は始まったばかりだ。



福田 陽子

オーロラ観測を終えた記念に、観測棟の屋上で

△(火曜日に掲載)

△(火曜日に掲載)

△(火曜日に掲載)